里の恵み・三田の「基盤」

三田市域の地形の基盤となる地層には、瀬戸内海やそれに続く湖によって堆積(たいせき)した柔らかい大阪層群・神戸層群と、その下部のより古い岩盤である有馬層群・丹波層群とがあります(市史第10巻地理編付図１参照)。

小柿の岩壁

これらのうち、丹波層群は篠山市との境界付近に分布し、母子(もうし)・永沢寺(えいたくじ)の一部や小柿(こがき)の羽束川(はつかがわ)上流で観察できます。丹波層群は日本列島の形成とも関わる非常に古い地層で、およそ２億数千万年以上前に熱帯の海で形成された「チャート」と呼ばれる岩石や、それが海洋プレートの移動で数千万年がかりで大陸縁辺(えんぺん)部に到達した際に堆積した頁岩(けつがん)類などで構成されます。この時代は丹波竜に代表される恐竜の全盛期です。このうちチャートは着火具である火打ち石にも使われる非常に固い岩石で、風化されにくく地上には巨岩としてそびえる傾向があります。市史第４巻の付図である江戸時代の小柿村絵図をみると、丹波層群が分布するあたりには「氷柱岩(つららいわ)」・「天ぐ岩」や「さつき岩」などの名の岩山が描かれており、地域の特徴的な景観として名付けられていたことがうかがえます。

もう一つの岩盤である有馬層群は、大規模な火山活動によって形成された地層と考えられます。数種類の岩石に区分されますが、市域の近辺でおこった火山噴火の噴出物や巨大噴火で粉砕された丹波層群などの岩片類が再固結した岩石であり、やはり硬質で風化に強い性質をもちます。市域の南部では大阪層群や神戸層群に覆われており、武庫川の河床などで観察できます。北部では山塊(さんかい)として地上にあらわれ、ほかの地層に比べて硬いため、有馬富士や羽束山に代表される非常に秀麗(しゅうれい)な山並みを形作り、古くからの名所となっています。また有馬層群の岩石は、弥生時代の石器や古墳の石室、藍本の酒滴神社(さかたれじんじゃ)の鳥居に代表される石造物などの材料としても古くから利用されてきました。三田の「基盤」もまさに里の恵みです。

生涯学習支援課 市史編さん担当